αリポ酸

R体の有用性を包接で実現

αリポ酸は、ミトコンドリア内でATP産生する際に解糖系とTCA回路で働く。解糖系ではミトコンドリアに送られた糖がピルビン酸に変化した後、そのピルビン酸がTCA回路に入れるように、アセチルCoAに変化させる。また、TCA回路では効率良くATP産生するために働くCoQ10を活性化させる。

シクロケム

現在、市販されるαリポ酸はR体とS体の光学異性体を等量に含むラセミ体だが、ミトコンドリア内にはR体のみが存在する。㈱シクロケムは、この点と「R体が抗酸化・抗糖化・抗老化作用など生する際に解糖系とTで最も高い有効性を示CA回路で働く。解糖している研究発表があ・ルギー産生に働くという。さらに、γCD包る」（寺尾社長）ことに着目。R体をγCD接CoQ10と同時摂取で安定化した「R（＋）のヒト試験では単独摂-αリポ酸のγCD包取よりも持久力や運動接体」を開発した。これ能力の向上を認められまでR体は融点が低ている。また、αリポく、胃酸で簡単に分解酸のR体はミトコンドされるため、利用が困リアで還元型のジヒドP産生するために働くCoQ10を活性化させる。

難であった。そこで、同社は「γCDで包接して安定化させることで、R体αリポ酸の機能性を効率良く発揮できるようにした」と言う。

γCDで包接したことで、タンパク質と同時摂取しても結合して吸収されない等の問題も解消され、食後摂取でも効率良く吸収されミトコンドリアのエネ

ロリポ酸（DHLA）に変換され、DHLAはCoQ10を還元型に容易に変換する。このため酸化型CoQ10と同αリポ酸を併用すると、還元型CoQ10と同様の抗酸化作用が得られることもヒト試験で明らかにされている。